

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 教授

氏名 茂木一孝

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

担当している授業・実習科目では、動物の示す行動を司る神経系などのメカニズムを学ぶとともに、行動の背景にある動物の心についても考察してゆく。人間社会において動物の行動や心という視点から諸問題を解決できる人材を育成する責任がある。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1	140
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1	146
動物行動神経科学	動物応用科学科	必修	2	162
応用動物心理学実習	動物応用科学科	選択	3	54
専門ゼミ	動物応用科学科	選択	3	6
動物発達行動学実習	動物応用科学科	選択	4	13
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	4
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	4
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	2
卒業論文	獣医学科	必修	6	2
愛玩動物学Ⅰ	獣医保健看護学科	必修	1	78
愛玩動物学Ⅱ	獣医保健看護学科	必修	1	78
動物神経科学特論Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	1	3
動物神経科学特論Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	1
動物共生科学特別演習Ⅳ－Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	1	3
動物共生科学特別演習Ⅳ－Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	1
動物共生科学特別研究Ⅳ－Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	1	3
動物共生科学特別研究Ⅳ－Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

動物の心という視点を持つことで、現在社会における動物に関連した諸問題で見いだせる解決方法があるかもしれない。また今後の動物との共生社会においても、この視点を持つことで、動物の新たな活用方法を見いだすなどの豊かな共生社会が創造できると考えている。担当している授業・実習科目で動物の心を学んだ経験をもとに、現在の動物に関連した諸問題の解決、新しい共生社会の創造に貢献する人材を育成したい。そのためには、単に知識のみを覚えさせるといった教育ではなく、学んだ知識をもとに社会における諸問題に対して自ら考え、これまでと異なる視点から探求することで新たな課題を見出せる人材を育成する教育をしたい。また、実際に社会で活躍するためには、今後ますます共同作業が重要になると考えている。目標達成のために、他者と柔軟に協力し、自身の役割を全うできる人材を育成したい。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

学んだ知識をもとに、社会や職場での諸問題にこれまでと異なる視点から取り組むことができ、新たな課題を見出せる人材を育成するためには、例えば現在考えられている動物の行動メカニズムの知識のみを教授するだけでなく、そのメカニズムがどのような疑問をもとに、どのように追求されてきたかのプロセスを理解させるような教育が重要だと考えている。なぜなら、様々な問題の解決や新たな課題を見出すためにそもそも一番重要なことは、様々な問題や観察される現象に対してどのような疑問を設定するか、だからである。疑問を持つことで考える道筋ができ、これまでにないような疑問からは独創的な解が生まれる。知識を教授するような講義においても、その知識が見出されてきたプロセスも解説することで、その知識の背景にあるそもそもの疑問がどのような視点からのものなのか、また疑問をもつことが如何に重要かということを理解させるようにしている。実習においても、担当実習では実際に犬を扱い、行動を観察してより家庭犬に相応しい行動をするようにトレーニングをする場面などがあるが、まずはその犬がなぜその場面でそのような行動をするのかといった疑問や、何がその犬をトレーニングするに相応しい課題なのかを学生自身が生み出せるように対話を通じて誘導するようにしている。学生自身の疑問から設定した課題を解決する、という体験をさせるようにしている。

また卒業後の社会で目標を達成させる重要な力の一つは、目標に向かって共同作業できる能力だと考えているが、そのために主に実習ではグループワークによって課題解決に取り組ませている。グループでどの目標に取り組むかを議論した後、達成のための計画を立案させ、定期的なミーティングで方向性の確認や修正をさせながら、目標達成まで対話を通して指導している。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

3年次選択の応用動物心理学実習では、保護犬を学内に導入して各犬を履修者がグループで飼育管理しているが、各犬に必要な課題を学生自らが考え、それをグループで議論しながら家庭犬としてのトレーニングを進めさせている。

(2) ICTの教育活用

有

全ての講義はGoogle Meetで録画し、録画ファイルは復習用教材として活用している。体調不良者などにはオンラインにて授業に参加してもらっている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

2年次必修の動物行動神経科学では、実際の動物実験の紹介や論文のグラフを積極的に活用することで、単なる知識の暗記ではなく、知識が見出されてきたプロセスを理解させることも重要な目標としている。2年次ではまだグラフの見方に慣れていないことを考慮し、グラフの説明は軸の説明から詳細にするなど、できるだけ丁寧な説明を心がけている。

（２）学生の理解度の把握

A

動物行動神経科学では、講義中にAzaMoodleのアンケート機能を積極的に活用し、グラフから何がわかるかといったことを回答させることで、講義の理解度の把握に努めている。

（３）学生の自学自習を促す工夫

A

応用動物心理学実習では犬猫の保護団体の施設での飼育管理を体験させたり、愛玩動物学においては特別講師として実際の補助犬を扱う団体の方から話を聞く機会を作るなど、実際の社会問題に触れて考えさせることで学びへの興味が沸くようにしている。

（４）学生とのコミュニケーション

B

講義中や講義後に質問がないかを呼び掛けると特定の学生からの反応はみられるが、全体とのコミュニケーションは今後の課題である。

（５）双方向授業への工夫

B

実習においては、例えば応用動物心理学実習では学生がグループで議論しながら家庭犬としてのトレーニングを進める過程において、問題点を明確にしてその解決策を導くような対話ができているが、講義に関しては今後の課題である。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

『この授業の予習・復習を週当たりどの位行いましたか』の設問において2割程度の学生が30分未満という回答であったため、課題や小テストをすることで復習させるように手配した。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

小テストはほとんどの学生が回答していたが、一部の学生の回答率が悪かった。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

小テストの回答率が悪い学生には積極的に声掛けしてゆく。また復習の小テストとともに、次回の内容を予習させるような取り組みが課題である。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

学生の成績を向上させるためには、何よりも学生が自ら学ぶ姿勢となることが重要だと考えている。そのためには、学生がその学問を面白がれるかどうかは鍵ではないだろうか。これまでも、動物の行動実験の実際の動画や、その学問が実際にどのような社会問題とつながっているかなどを紹介することで、学びの面白さを伝えてきているが、もっと多くの社会体験が必要なのではと考えている。

(2) (1)の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

授業評価では実際の実験について知ることができて面白かった、という意見や、実際の社会問題を知ることによって興味が沸いたといった意見がみられている。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

FD研修会「本学のディプロマポリシー（DP）に関する分析結果および学生の学修成果の可視化」などに参加することで、今後の教育活動において有益な情報を得ることができた。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

短期的には、ゼミにおいて自身の研究課題の解決策を自ら考えて提案できるように指導したい。長期的には動物応用科学科の学生の学力の幅の大きさに対してどのように対応するかの方策を見い出したい。授業のレベルを落とすことなく、学力の低い学生にも学問に興味をいだかせ、如何に授業に取り込むかの具体策が必要だと考えている。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

授業評価アンケート